

## 論文審査結果の要旨

論文提出者氏名 鴻野知暁

論文題名「逆接句を構成するコソの係り結びとその周辺」 審査結果

該論文の公開審査会は2016年5月28日午後5時より、東京大学駒場キャンパス14号館605会議室にて、審査員5名全員の立ち会いのもと、厳粛に執り行われた。

該論文は6章からなる。

第1章では、本論の「目的と構成」が簡潔に述べられている。

第2章・第3章では、本論文の眼目である逆接句と助詞コソによる係り結びとについて論述される。さらに第4章では、コソと対照的に把握されることの多い助詞シの文法的性格が分析され、第5章では、逆接性を持たない係り結びのコソについて検討がなされる。

第6章は全体の要約である。以下、第2～5章の内容を概観する。

まず第2章について。現代日本語と古代日本語の「逆接」については、従来「推論」概念を中心とした検討が行なわれてきたが、本論は「期待性」という心理的概念を中心に再検討を加える。「期待性」は「推論」をも含むより包括的な概念であり、従来説明しづらかった「手紙を待っていたのについに来なかった」のような非推論的タイプの逆接をもこの概念で適切に把握できる。著者は、逆接をまず「期待性」の有無によって二分し、期待性の認められないものを従来の「対比」と認める。他方、期待性の認められるタイプについては、期待性のあり方によって「言語主体の期待が否定される－意外的逆接」と「言語主体が（相手や第三者の）期待を否定する－反発的逆接」とに二分し、結局逆接には「意外的逆接、反発的逆接、対比的逆接」という三つのタイプが認められるとして、さらにその詳細を検討していく。

「意外的逆接」には「a 論理的推論による期待」、「b 言語主体の意思・希望・予想」、「c 意思・希望・予想を伴う行為」の三者があり、aはさらに「a 1 原因から結果への推論、a 2 結果から原因への推論」に分割される。「反発的逆接」には「d 相手の短絡への非難」「e 通常とは異なる心情の表明」「f 障害への反抗的行為」の三者が認められるとする。これに「g 対比的逆接」が加わって、逆接の全分野が覆い尽くされる。

他方、古代の「コソ～已然形（コソによる係り結び）」が構成する逆接は、以上のうちの「a 2 結果から原因への推論」（「昨日こそ年は果てしかー春霞……はや立ちにけり」・「相当に時間が経っている（裏切られる原因推論）のに、もう春霞が立っている」）タイプと「d 相手の短絡への非難」（「人目多み目こそ忍ぶれ少なくも心の内に我が思はななくに」・「人目が多いので逢うことはこらえているけれど、だからと言って心の中で思っていないわけではない（相手への反発）」）との二者に限られるという。

「コソ～已然形」が逆接を表わすケースがあることは従来よく知られていたことがらだが、その場合の逆接がどのようなタイプであるかという点にまで考えを巡らした人は、これまでまったくいなかった。「コソ～已然形」が、a 1 タイプ「我が待ちし秋は来りぬ（原因）然れども萩の花そもいまだ咲かずける（裏切られた結果）」などを構成することはないとの指摘は、言われてみれば確かにそうなのだが、驚くべきことである。

第3章では、第2章で指摘された二つの「逆接のコソの係り結び」がどのように発生す

るか、その構成原理が助詞コソの語性から解明される。著者によれば、コソは、上接する語の指示対象を「話者に前もって設けられた基準から逸脱する特殊なもの」として扱う性質があるという。たとえば、「意外的逆接」の「昨日こそ年は果てしかー春霞…はや立ちにけり」の場合には、春霞が立つのは、ずっと前に年が果てているなら自然なことと考えられるのだが、年が果てたのは実ははたった一日前の、昨日のことでしかない。この意外性を「コソ～已然形逆接」が表わしているとする。また、「反発的逆接」の「雪こそは春日消ゆらめ心さへ消え失せたれや」では、「消え失せる」という相手（ないし世間）の推論は、恋心とかけ離れた「雪」の場合には妥当するだろうが、「私たちの仲」には決して妥当しない。このように他者の推論を先取りし、否定するところに反発の語気を認めるべきであると著者は指摘している。

他方、第4章では助詞のシの特性が「一つの対象の重大視、他の等閑視」と規定される。シには、限られたパターンの構文に現れるという特徴があるのだが、この現象は、「専らそればかりを問題にする」というシの特性から説明可能であるという。興味深いのは条件表現の場合で、著者は、日常言語における条件表現に関する坂原茂氏の研究を援用しつつ、条件表現でシが多用される理由をこう説明する。日常の条件表現では、十分条件を構成する命題の集合のうち、ただ一つが表現されればよいのであり、そのことが「一つの対象の重大視、他の等閑視」というシの語性に適合するというのである。鮮やかな指摘と言うべきだろう。

さらに第5章では「名詞（句）＋コソ」は「名詞（句）＋ニコソアレ」からの縮約形式であり、中古になってから使用され始めたことが指摘されている。そしてその事実が、述語の内部に係助詞が入り込んでゆく歴史的過程の一環と位置づけられる。本来コソは強烈に例外状況を作り出す助詞であって、だからこそ逆接性を伴ったのだが、後には、対象を傑出した存在として扱うように変質した結果、話者の設けた基準との対比する意識が希薄になって、後句と関連づける必然性も乏しくなった。「コソ～已然形」だけで終止する係り結び文が優勢になったのはそのためだという。並行して、特異な例外を示す必要がなくなったことから、その部分を特に取り立てる必要もなくなり、文中の重大な箇所への関心も薄くなったために、文中用法から述語内用法への変遷が生じたともいう。

題名にも示されているとおり、本論文の主要な関心は「コソ～已然形」の逆接用法にあるが、逆接と一括される語法は意外に複雑であって、その的確な整理に成功した研究はまだ現れていなかった。鴻野氏が「期待性」という概念を導入した点は、逆接一般の整理としてもたいへん行き届いたものであり、それ自体がこの論文の大きな成果と言える。しかも、この見地を「コソ～已然形」の逆接用法に及ぼし、この語法の本質をコソの語性とも関連づけながら鮮やかに解明してのけた。結果的には、現代日本語の研究にも応用可能な一般的見地を提出することに成功したと言ってよい。

むろん、残された課題も多く、審査会の席上でも疑問や批判がいくつか出た。たとえば、係助詞一般の性格として、文の一部分に作用する場合と文全体に作用する場合を統合する原理が示されていない。もっともこれは、これまで解決されたことのない難題でもあって、本論文の著者に責任を帰するのは酷かもしれない。また、第3章の「意外的逆接」と「反発的逆接」については、二種類が区別されることの指摘には成功しているが、その構成原

理の整理に不十分に見える部分があるとの指摘がなされた。何が両者に共通し、何が両者を分かつか、この点が明確になるような、さらに熟した書き方が望まれるとの意見も出た。さらに、「已然形」そのものの性質の記述が意外に手薄であるとの、かなり重大な指摘もなされた。「已然形」には事柄の自然な継起を表わす性質があつて、その句にコソが入り込むことによって「a 2 結果から原因への推論」や「d 相手の短絡への非難」のような現象が生じるのだから、この点を素通りするのでは論の説得力が少なからず殺がれるとの指摘である。さらに第5章で扱われた、逆接を伴わない「コソ～已然形」係り結びの発生過程についても、著者なりの説明はなされているが、他の可能性を封じ切れていないのではないか、との疑問が出された。

こうした課題が残るとはいえ、これらはみな、今日の日本語学自体が抱えている限界的な課題だとも言える。本論文は、日本古代語文法論のもっとも困難な課題に果敢に挑戦し、相当の成果を挙げた論考として高く評価されるし、それどころか、学界から驚きと喜びとをもって迎えられることも必定である。審査員一同もまた、驚きと喜びとをもって、博士（学術）の学位を授与するに十分ふさわしい論文であると判定した次第である。